

# 接辞の意味領域に関する一考察： 非有生の目的語の指示に着目して

A Note on the Semantic Domains of Affixes:  
With Special Reference to Inanimate Object Nominals

二 村 慎 一

NIMURA Shinichi

キーワード：接辞、項の有生性、結果名詞

## 1. はじめに

英語には動詞から名詞を派生する接辞が数多く存在するが、非有生の目的語 (inanimate/non-personal object) を指示する名詞を派生する接辞は存在しないということがしばしば指摘されている。例えば、基体動詞の主語に相当する -er 名詞は一般に人も道具も表すことができる (例: tennis player, hair dryer) が、その目的語相当の -ee 名詞は一般に人しか表さない (例: employee)。本稿の目的は、接辞の意味領域に関する問題、すなわち非有生の目的語を指示する接辞の欠如に関しての言語事実を整理し、説明されるべき課題を明らかにすることである。

本稿の構成は以下のとおりである。2節では、動詞の項を指示する名詞化接辞の意味機能に注目し、非有生の目的語を指示する典型的な接辞の欠如について指摘する。3節では、この空白とされる意味領域を埋めるために、どのような派生名詞類が転用されているのかを概観する。4節では、その転用形のひとつであるラテン系名詞化接辞を用いた名詞に着目し、結果名詞の派生について議論する。最後に5節では、本稿の結びとして問題点を整理し、今後の展望を示したい。

## 2. -er 名詞、-ant 名詞、-ee 名詞の有生性<sup>1</sup>

本節では、-er 接辞、-ant 接辞、-ee 接辞の有生性に関する意味特性を議論し、非有生の目的語を指示する接辞の欠如について見ていきたい。

Booij and Lieber (2004: 352)、Lieber (2004: 73)、Lieber (2016: 76) などでは、動詞の項を指示する接辞の分布に関して、下記のような指摘がなされている。

### (1) [+material, dynamic]<sup>2</sup>

subject	-er, -ant/-ent, -ist
personal object	-ee
non-personal object	**

(Lieber (2004: 73))

(1) に示されているように、主語に相当する名詞を派生する接辞には -er や -ant などが存在し、有生の目的語に相当する名詞を派生する接辞には -ee が存在するが、非有生の目的語に相当する名詞を派生する典型的な接辞は存在しないとされる。

まず、主語指示の接辞の有生性から見ていきたい。例えば、-er も -ant も人ともものを表すことができ、(2) と (3) がそれぞれ人ともものを表す -er 名詞、(4) と (5) がそれぞれ人ともものを表す -ant 名詞の例である。<sup>3</sup>

- (2) a. interviewer ‘the person who asks the questions in an interview’  
b. writer ‘a person whose job is writing books, stories, articles, etc.’
- (3) heater, opener, sprinkler, peeler, dryer, cooker. . .<sup>4</sup>
- (4) a. defendant ‘the person in a trial who is accused of committing a crime’  
b. accountant ‘a person who keeps or inspects financial accounts’
- (5) a. stimulant ‘a drug or substance that makes you feel more awake’  
b. intoxicant ‘a substance such as alcohol that produces false feelings of pleasure’

例えば、(2a) の interviewer は「面接者」、(3) の heater は「暖房器具」、(4a) の defendant は「原告」、(5a) の stimulant は「刺激剤」をそれぞれ意味する。このように、有生の主語と非有生の主語を指示する典型的な接辞が英語には存在している。

次に、-ee 名詞を見たい。一般に「主語か目的語か」という意味において、-ee 名詞は -er 名詞の反意語としてみなされているが、後者とは違い、人しか表すことができない (cf. Barker (1998))。まず、(6) を見られたい。

- (6) a. employee ‘a person employed for wages or salary’  
b. interviewee ‘the person who answers the questions in an interview’

(6) の基体動詞である employ や interview は有生の目的語をとることができ、それらの -ee 名詞はそれぞれ「雇われている人 (従業員)」と「面接を受ける人」を表すことができる。しかしながら、(7) に示すように、非有生の目的語をとる動詞には -ee は原則付加できない。

- (7) \*constructee, \*inventee, \*extende. . .

例えば、construct は一般に非有生の目的語しかとることができないため (例: We constructed a bridge/?student.)、それを基体とした \*constructee のような -ee 名詞は指示対象が同定できず容認されない。このように、目的語指示の -ee 接辞は、有生という語彙指定を持っていることが分かる。<sup>5,6</sup>

### 3. 様々な転用名詞

前節では、非有生の目的語を指示する典型的な接辞が欠如していることを見たが、そのような指示名詞が存在していないという訳ではなく、他の動詞由来名詞が転用されている (cf. Lieber (2016))。本節では、どのような動詞由来名詞が転用されているのかを概観する。具体的には、代表的な転用形である事象名詞、-er 名詞、-ables 名詞を取り上げたい。<sup>7</sup>

まず、事象名詞であるが、Grimshaw (1990) の包括的な名詞化の研究以来、-tion や -ment などのラテン系名詞化接辞を用いた事象名詞は、基体動詞の目的語に相当する結果名詞としての解釈も可能であることがよく知られている。(8a) が事象名詞、(8b) が結果名詞の例である。

- (8) a. They observed the assignment of the problem.  
b. The assignments were long. (Grimshaw (1990: 54))

(8a) の assignment は基体動詞である assign の事象そのものを表しているが、(8b) の assignments は「(与えられた) 課題」を表し、assign の目的語に相当する (事象名詞と結果名詞の統語的な違い、すなわち、前者のみが the problem のような項をとること、また後者のみが複数形になりうることに関しては、Grimshaw (1990) を参照されたい。また、下記 (21) と (22) も参照のこと)。(8b) のような非有生の目的語を指示する結果名詞としては、下記のような例が挙げられる。

- (9) construction, collection, possession, discovery, allotment, portrayal, establishment, addition, creation, equipment. . .

例えば、construction は、「建築 (すること)」という事象の解釈だけでなく、「建造物」という目的語相当の具象物の解釈も可能である。

また、ゲルマン系名詞化接辞 -ing を用いた名詞は一般に事象名詞の読みしかないとされている (Grimshaw (1990: 50, 56)) が、(10) のような -ing 名詞は例外的に結果名詞として用いられる。

- (10) finding(s), building, writing, painting, saving(s), carving, feeling(s). . .

例えば、findings は「発見物」を表しており、このような例は多くはないが、-ing 名詞も非有生の目的語を指示できる場合があると考えられる。

さらに、転換名詞も結果名詞としての解釈が可能である。(11) は Bauer et al. (2013) が挙げている例の一部である。

- (11) buy, exhibit, gain, grant, offer, waste, yield . . . (Bauer et al. (2013: 239))

例えば、buy は「格安品」を意味し、目的語相当であろう。

次に、-er 名詞の転用例を見ていきたい。Lieber (2004, 2016) は、主語指示の -er 名詞も非有生の目的語を指示する可能性があることを指摘している。(12) は COCA から抽出された実例である（下線は筆者）。

- (12) I had taken bears before and had been hunting for several years for a truly outstanding bear, and here one was standing broadside at 20 yards. I didn't have to think twice about this bear. It was a shooter. (Lieber (2016: 133))

この文脈では、shooter は主語相当の「狩猟者」や「連発銃（道具）」ではなく、（獲物である）bear の解釈、すなわち目的語相当で使われていることが分かる。

最後に、接辞 -able が用いられた事例を見ていきたい。一般に -able という接辞は他動詞に付加し、基体動詞の目的語相当の名詞を修飾または叙述する形容詞を派生する。(13) を見られたい。

- (13) a. an acceptable (solution)  
b. These sweaters are washable.

(13a) の acceptable は「受け入れられる（解決策）」という意味の形容詞であり、被修飾語の名詞 solution は基体動詞 accept の目的語相当であるとみなされる。(13b) の washable は「洗濯可能な」という意味の形容詞であり、These sweaters は主語位置にはあるが、基体動詞 wash の目的語に相当する。しかしながら、Lieber (2016) は COCA と Corpus of Historical American English (COHA) に基づいた共時的・通時的な生産性の調査から、本来複数形である -ables 形が近年それ自体名詞化接辞としての地位を獲得し、非有生の目的語を指示する接辞として用いられるようになってきている（また、その変化の途中である）と指摘している。<sup>8</sup> (14) は Lieber (ibid.) が挙げている転用例の一部であり、(15) が COCA からの実例である（下線は筆者）。

- (14) acceptables, adaptables, adorables, affordables, breakables, burnables, buyables, changeables, collectables, consumables, deliverables, disposables, drinkables. . . (Lieber (2016: 80))

- (15) *Fortune 1993*: The “great affordables” package advertised by a marketing group called Leading Hotels of the World includes a host of frills like free champagne and

breakfast, and a price break at many hotels, including Claridge's and the Savoy in London and the Hotel de Crillon in Paris. (ibid.: 81)

(15) の affordables は free champagne and breakfast のような「提供されうるもの」を表し、非有生の目的語に相当すると思われる。

確かに、このような -ables 名詞の転用例は多く、下記 (16) は筆者が British National Corpus (BNC) から、(17) は WordbanksOnline から集めた実例の一部である（下線は筆者）。

(16) a Richard Branson opens a shop in London's Oxford Street, flogs bootlegs and other desirables — and takes over £6,000 in his first week.

(*New Musical Express*)

b. It removes a standard Behaviouralist reason for thinking that science should stick to observables and for presuming that observation can be pure.

(*Explaining and Understanding International Relations*)

c. The scheme is designed for the younger (less than 36 years old) organic chemist, the funds to be used for the purchase of equipment, books and consumables, technical assistance, professional travel or any other activity directly related to the research being undertaken.

(*Chemistry in Britain*)

(17) a. . . . started making clothes to fit babies wearing washables, most of which are bulkier than disposables.

(*Times, Sunday Times*, 2008/4/28)

b. Harry was a gallant fellow; then striking him over the shoulder, welcomed him home with all his kind heart, told him he was proud to receive him, and falling into a state of rapturous hospitality, rang the bell, and wanted to order all sorts of eatables and drinkables, but was sadly baffled to find him already satisfied.

(*The Daisy Chain*)

c. And nowadays the items on display don't have to be ancient either. Modern collectables such as early computers can fetch as much as a Victorian dining table.

(*The Sun*, 2008/11/22)

例えば、(16a) の desirables は「(bootlegs や他の) 望まれうるもの」の解釈であり、また (17a) の washables と disposables はそれぞれ「洗濯可能なおむつ」と「使い捨てのおむつ」の解釈であり、非有生の目的語を指示していると考えられる。

## 4. 結果名詞の派生

今まで、英語には非有生の目的語を指示する典型的な接辞が存在しないこと、またこの空白の意味領域を埋めるために様々な派生名詞類が転用されているという言語事実を見てきた。この転用は、Booij and Lieber (2004) や Lieber (2004, 2016) で提案されているパラダイムの圧力 (paradigmatic pressure) という意味拡張の観点から説明されるかもしれない。-er 接辞のような意味的に近く生産的な接辞がその主とする意味領域以外に、その言語で空白の意味領域を必要に応じて表すという考え方である。しかしながら、そもそも、ある意味領域を典型的に表す接辞とその領域に転用 (意味拡張) される接辞との違いは何であろうか。つまり、転用接辞とされる -er 接辞やラテン系名詞化接辞が非有生の目的語を指示する典型的な接辞であるという可能性はないのだろうか。確かに、2 節で議論したように、-er は主語指示がその語彙特性であると考えられ、それが非有生の目的語を指示する事例は多くなく、意味拡張であるという分析は妥当なものだろう。しかしながら、ラテン系接辞に関しては、その結果名詞としての用法は生産的であり、転用の代表であると考えられ、その語彙特性として非有生の目的語を指示するという分析が可能かもしれない。以下では、この可能性について考えたい。

Lieber (2016) の分析のように、結果名詞が転用形であるという分析が意味することは、事象名詞から結果名詞が形成されるということである。つまり、ラテン系接辞は典型的に事象名詞を作る接辞であり、結果名詞は基体動詞から直接的に生成されていないということになる。確かに、この分析はラテン系派生名詞が表す事象の完結性 (telicity) に関する通言語的な観察から支持されるかもしれない。Cornilescu (2001: 487) はルーマニア語の 2 つの派生名詞 (-re 名詞と -t 名詞) の完結性の違いと結果名詞の読みの有無との関係性 (具体的には、-re 名詞は完結事象を表し、結果の読みが可能であるが、-t 名詞は非完結事象を表し、結果の読みがないということ) から、結果名詞は事象名詞からの意味拡張により形成されると述べている。この事実はラテン系派生名詞と -ing 名詞においても観察される。Hayase (1996) や Brinton (1998) によると、ラテン系派生名詞は完結事象を表し、-ing 名詞は非完結事象を表す。(18) と (19) を見られたい。

- (18) a. the complete {destruction / \*destroying} of the city  
 b. the absolute {elimination / \*eliminating} of foreign dependencies  
 (Hayase (1996: 256))
- (19) a. In Japan {?\*the immigrating / the immigration} of boat {people} recurred again and again in 1980.  
 b. {\*The discovery / The discovery} of new treasures happens all the time.  
 (ibid: 257)

(18a) の complete と (18b) の absolute は完結事象を修飾する形容詞であり、それぞれ

destruction と elimination とは共起するが、destroying と eliminating とは共起しない。また (19a) の again and again と (19b) の all the time は事象の繰り返しの解釈を強制するため、完結事象とのみ共起する。

さらに、(20) に示されるように、一般に arrive のような（完結事象を表す）非対格動詞を基体とした -ing 名詞は容認されないが、ラテン系派生名詞は容認されるという事実も両者の完結性の違いを示唆するだろう。

- (20) a. \*the arriving of John  
b. the arrival of John (Alexiadou (2001: 51))

このような (18) から (20) の言語事実とラテン系派生名詞による結果名詞の転用は多く、-ing 名詞による転用は少ないという言語事実は、結果名詞は事象名詞から派生されるという分析を裏付けるかもしれない。

しかしながら、上述の分析では説明することが難しい通時的な問題が存在する。ラテン系名詞化接辞は中英語期に英語に導入された (cf. Kastovsky (1992)) が、結果名詞としての用法が先であったことが指摘されている。Niwa (1993) は、中英語期の The Canterbury Tales においてラテン系派生名詞は主に結果名詞として使われていたと述べている。(21) は The Canterbury Tales からの例である。

- (21) a. On purveiaunce of God, “providence of God” (The Knight’s Tale, 1252)  
b. Who sholde make a demonstracion (Summoner’s Prologue & Tale, 2224 [21])  
c. Al telle I noght as now his observaunces (The Knight’s Tale, 2264)  
(Niwa (1993: 28-30))

(21a) の purveiaunce (providence) は what God intends and does を意味し (Niwa (1993: 29))、「神の摂理、神意」の解釈と思われる。また、(21b) の demonstracion は不定冠詞 a と共起し、(21c) の observaunces は複数形となっている（結果名詞は不定冠詞と共起し、事象名詞は共起しないという議論に関しては、Grimshaw (1990) を参照されたい。また、上掲の (8) も参照のこと）<sup>9</sup>

また、Naya (2016) も、the Oxford English Dictionary にリストされている 1450 年から 1600 年までに借入された 165 個の -ment 名詞を調査し、結果名詞は事象名詞から派生されるという分析には経験的に問題があると指摘している。165 個の -ment 名詞のうち、106 個が事象名詞と結果名詞の読みを持つが、そのうちの 77 個の初出例が事象名詞ではなく、結果名詞としての用法であるという。例えば、admeasurement の例を見られたい。

- (22) a. 1598 Admeasurement lies between commoners.  
(Kitchin, John *Jurisdictions: or the Lawful Authoritie of Courts Leet, Courts Baron*)
- b. 1767 When the terror is so great, no dependence can be placed upon the admeasurement of time in any person's mind.  
(Hutchinson, Thomas *The History of the Province of Massachusetts Bay (1628-1750)*) (Naya (1996: 45))

(22a) が初出 (1598 年) であり、この admeasurement は項と共起していないため結果名詞と考えられる。一方、(22b) の admeasurement は time という項と共起しているため事象名詞と考えられるが、その出現は 1767 年になってからである。

また、Naya (ibid.) によると、156 個の -ment 名詞のうち 59 個が結果名詞としての読みしがなく、事象名詞の読みは存在しない。次の (23) の -ment 名詞がそのような例の一部である (カッコ内の数字は初出年を表している)。

- (23) attainment (1549), besiegement (1564), consignment (1563), detainment (1586), disagreement (1495), entrenchment (1590), requirement (1530), revelation (1590) . . .  
(Naya (ibid.: 46))

このような -ment 名詞の存在も、結果名詞は事象名詞から派生されるという分析の反例となるであろう。

以上、(21) から (23) の言語事実は、結果名詞は事象名詞からの意味拡張ではなく、事象名詞とは独立して形成されるという可能性を示唆している。すなわち、ラテン系名詞化接辞はその語彙特性として典型的に非有生の目的語を指示する接辞である可能性が出てくる。

## 5. 結び

本稿では接辞の意味領域において空白とされている領域、すなわち非有生の目的語に相当する意味領域に関する諸問題を考察してきた。今回の考察から明らかになった課題は下記の 3 点である。

- (24) a. 主語指示に関しては、-er 名詞のようにひとつの派生手段によって有生の主語も非有生の主語も指示されうるが、目的語指示に関しては、その典型的な手段とされる -ee 名詞は有生の目的語のみを指示する。このような有生性に関する違いはなぜ観察されるのだろうか。この違いは、主語と目的語という統語領域の違いに起因するのであろうか、または -er や -ee のような接辞固有の特性に起因するのであろうか。この有生性に関する違いを説明する必要があるであろう。可能性のひとつとして、

Nimura (2010) で議論されているように、接辞の意味機能に関する史的発達が関係するかもしれない。詳細は Nimura (2010) に譲るが、-er や -ant は有生の主語を指示するだけでなく、非有生の主語も指示できるように機能を発達させたが、-ee はこのような発達をしなかったことが指摘されている。

- b. 空白とされる非有生の目的語がかかわる意味領域を埋めるために、事象名詞をはじめとして様々な派生名詞が用いられている。そうだとすると、実質非有生の目的語を表す手段は存在していることになり、そもそも空白や欠如という考え方には妥当性があるのだろうか。すなわち、非有生の目的語を典型的に指示する手段（接辞）が存在するという考え方はできないのだろうか。そのような手段の候補として、ラテン系名詞化接辞を用いた結果名詞が考えられる。当該結果名詞が典型的な指示名詞であり、何らかの（おそらく意味的な）理由でそれが担うことができない場合に、-ables 名詞のような他の転用形がそれを補っているという考え方も可能かもしれない。または、Lieber (2016) の主張が正しいとすると、-ables 名詞化接辞も典型的な接辞のひとつと考えられるだろう。「典型的な専門の規則」と「転用（意味拡張）」の線引きは難しいが、意味領域における派生手段（接辞）の分布・すみ分けの全体像を解明するには、さらなる詳細な議論が必要となるであろう。
- c. 上述(b)の可能性がありうるとすると、ラテン系名詞化接辞による結果名詞の形成は、ある種の語形成規則によりおこなわれ、またそれは事象名詞の形成とは独立した規則であることを意味する。究極的には、-tion などの接辞はひとつではなく、二つ存在することを意味するが、結果名詞形成接辞はどのような語彙特性を持っているのか、その語形成規則はどのように形式化されるのか、それらは (18) から (20) で観察したアスペクト特性とどのように関係するのかなどを明らかにする必要があるであろう。

## 注

1. 本節は Nimura (2010) の第1節と第3節を加筆・修正したものである。
2. Lieber (2004) で採用されている語彙意味論的枠組み (the Lexical Semantic Framework) では、接辞を含め語彙の意味は [material] などの意味素性の組み合わせによって表示される。[+material, dynamic] という語彙表示は、当該接辞が事象的な具象名詞を形成することを表している。意味素性は品詞とは独立して特徴づけられるため、pianist のような名詞を基体とする -ist も同じような語彙表示となる。
3. (2) から (6) までの定義は *Oxford Advanced Learner's Dictionary* 7th edition による。
4. -er 名詞の道具の解釈と基体動詞の主語との関連性については、Rappaport Hovav and Levin (1992) を参照されたい。-er 名詞が表す道具は主語位置に現れることができるといって一般化が提案されている。

5. 例外的に人以外を表す -ee 名詞も存在する。よく知られているように、言語学の文献では、-er との対比において、(binder や controller に対し) bindee や controllee などの用語が使われている。この点に関しては、Barker (1998: 710) を参照されたい。また、Bauer et al. (2013: 238) は、一般的な文脈においても人以外を表す場合があることを指摘し、Corpus of Contemporary American English (COCA) から下記のような実例を挙げている (下線は筆者)。

(i) *Horticulture 1991*: When a host shrub is not furnished with branches to the ground, or when the chosen tree branch is out of easy reach, the gap between the climber and the climbee must be artificially but unobtrusively bridged.

(Bauer et al. (2013: 238))

この場合の climbee は「木」を表していると思われる。

6. -ee は 15 世紀にフランス語から英語に借入されたラテン系接辞である (cf. Barker (1998)、Kastovsky (1992)) が、Barker (1998: 710) は下記の 2 つの借入語を挙げ、元のフランス語では人のみを表すという指定はなかったと指摘している。

(i) a. puree 'a kind of broth or soup made of vegetables, fruit, meat or fish'  
b. repartee 'a ready witty or smart reply' (Barker (1998: 710))

だとすると、有生の目的語を指示するという -ee の意味指定は、「英語化」された後になされたことを意味する。本文 (24a) の議論も参照。

7. 注 5 で述べたように、-ee 名詞も例外的に非有生の目的語を指示するため、転用される派生形のひとつであると考えられるだろう。
8. 派生形・非派生形にかかわらず、形容詞は転換によって名詞として用いられることがある (例: the rich や the Japanese)。したがって、-ables 名詞も転換によって派生された可能性、すなわち -able 形容詞が転換によって名詞化し、それに複数接辞 -s が付加した可能性もあるが、この議論に関しては Lieber (2016) を参照のこと。-ables 名詞と単数形の -able 名詞の生産性の違いや -ables 名詞と -ives 形の名詞 (例: derivatives) の生産性の違いなどから、この可能性は排除されている。また、-ables 名詞は -s という形式上、[-able 形容詞 (+ 名詞)] という修飾関係において後続の名詞が省略された形でもないことに注意されたい。Lieber (ibid.) が主張するように、-ables 自体が名詞化接辞であるとする、本文の「転用」という表現は正確ではなく、非有生の目的語を指示する典型的な接辞であるかもしれない。本文 (24b) の議論も参照。
9. 丹羽 (1995) は、フランス語経由の派生名詞は元々のフランス語でも結果名詞としての用

法しかなかったと述べている。下記は 11 世紀に古フランス語で書かれた La Chanson de Roland の La Traison からの例である。派生名詞 *guarnemenz* (*équipements*) が複数形であることに注意されたい。

- (i) *grant eschech d'or e d'argent e de guarnemenz chers*  
*un grand butin d'or, d'argent et d'équipements de prix*

(La Chanson de Roland, La Traison, 99-100)

(丹羽 (1995: 122))

#### 参考文献

- Alexiadou, Artemis (2001) *Functional Structure in Nominals: Nominalization and Ergativity*, John Benjamins, Amsterdam.
- Barker, Chris (1998) "Episodic *-ee* in English: A Thematic Role Constraint on New Word Formation," *Language* 74, 695-727.
- Bauer, Laurie, Rochelle Lieber and Ingo Plag (2013) *The Oxford Reference Guide to English Morphology*, Oxford University Press, Oxford.
- Booij, Geert and Rochelle Lieber (2004) "On the Paradigmatic Nature of Affixal Semantics in English and Dutch," *Linguistics* 42.2, 327-357.
- Brinton, Laurel (1998) "Aspectuality and Countability: A Cross-Categorial Analogy," *English Language and Linguistics* 2(1), 37-63.
- Cornilescu, Alexandra (2001) "Romanian Nominalizations: Case and Aspectual Structure," *Journal of Linguistics* 37, 467-501.
- Grimshaw, Jane (1990) *Argument Structure*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Hayase, Naoko (1996) "On the Interaction of Possessive Constructions with Two Types of Abstract Nominalization: A Cognitive Viewpoint," *English Linguistics* 13, 248-276.
- Kastovsky, Dieter (1992) "Semantics and Vocabulary," *The Cambridge History of the English Language* Volume 1, ed. by Richard M. Hogg, Cambridge University Press, Cambridge.
- Lieber, Rochelle (2004) *Morphology and Lexical Semantics*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Lieber, Rochelle (2016) *English Nouns: The Ecology of Nominalization*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Naya, Ryohei (2016) "Deverbal Noun-Forming Processes in English," *English Linguistics* 33: 1, 36-68.
- Nimura, Shinichi (2010) "The Functional Development of the Suffix *-ee*," *Synchronic and*

*Diachronic Approaches to the Study of Language: A Collection of Papers Dedicated to the Memory of Professor Masachiyo Amano*, ed. by Hirozo Nakano, Masayuki Ohkado, Tomoyuki Tanaka, Tomohiro Yanagi and Azusa Yokogoshi, 231-244, EICHOSHA PHOENIX, Tokyo.

Niwa, Makiyo (1993) "Nominalization Suffix and Argument Structure: A Note on the Canterbury Tales," *Linguistics and Philology* 13, 25-42.

丹羽牧代 (1995) "中英語のクレオール性試論," 『南山短期大学紀要』 第 23 号, 113-128.

Rappaport, Hovav and Beth Levin (1992) "-er Nominals: Implications for the Theory of Argument Structure," *Syntax and Semantics* 26, 127-153.